

痩す瘦すも 生けらばあらむを はたやはた

鰻を取ると 川に流るな

大伴家持 卷十六・三八五四

絶滅危惧種、ウナギ。ウナギは縄文時代から現代まで漁獲、食用されており、「万葉集」にも「武奈伎」として歌にやまれるなど、日本列島の漁撈文化、魚食文化にウナギは欠かせないものでした。

この歌は、大伴家持が吉田老という人物に向けてよんだ歌二首のうちの一首です。老は、

字を石磨といひ、どんなに飲食しても瘦せていたそうぞ、もう一首の歌で「石磨にれ物申す 夏瘦に良しといふ物そ 鰻取り食せ」(石磨に私は申し上げたい。夏瘦によいという物ですよ。鰻をとって召し上がりなさい。三八五三番歌)と歌われています。

吉田老は、他の文献

やまと 万葉がたり

等に記録がありませんが、吉田氏には、吉田直に始まる医術家の系統があります。もし老が医術家一族であったなら、家持は医術の知識に詳しく、ウナギの効用も知っていたはずの老に「夏瘦によい」とウナギを勧めたことになりそうです。医者の不養生をからかった歌、という見方もできるか

もしませんが、老自身の経歴が知られていないため断定はできません。

三八五四番歌では、ウナギをどうとうとして川に流されるな、と家持が歌うところから、老をさらにかからう内容になっていきます。しかし、瘦せては開発されています。ま

た、奈良県内の農山村では、ウナギではなくドジョウを食べる地域が多かったそうです。他にも、土用の入りに土用餅やハラフツ餅などと呼ばれる鮠をつけた餅を食べ、夏の間の健康を願う風習もあります。暑い夏を乗り切る知恵や風習を、見直してみる時期なのかもしれません。

(県立万葉文化館研究員・吉原啓)

|| 次回は23日

【訳】瘦せてはいても生きていればよいものを、かえって鰻をどうとうとして川に流されるな。

見れど飽かぬ

吉野の河の

常滑とこなめの

絶ゆることなく

また還り見む

柿 本人麿 卷一・三七

奈良県には、「万葉集」や「古事記」「日本書紀」などに見られる地名が数多く残されています。そうした土地を訪れることは、文学や歴史が好きな人にとっては知的好奇心を刺激される魅力的なシャワーであると言えるでしょう。吉野もまた、記紀・万葉にその名が多く見られる土地のひとつです。

本歌は、持統天皇の

吉野行幸に従った柿本人麿の歌で、三六番歌への反歌としてよまれています。三六番歌の最後は「…この川の絶えることのないように、この山が高いように、ますます永遠に高々と統治なさる、この激流のほとばしる滝の宮居は、いつまでも見あきないことだ」という歌意で、山と川との対比によって、吉野の自然とそこを治める天

やまと 万葉がたり

皇を賛美する歌になっています。

これに対して本歌は、川の永遠性にたとえて、いつまでも絶えることなく、くり返し吉野を見よう、と歌っています。持統天皇の吉野行幸が3回もくり返されたことを考えれば「絶ゆることなく」

【訳】見あきることとてない吉野、その川の滑らかさが永遠であるように、いつまでも絶えることなく、くり返し見よう。

「絶ゆることなく」は歌の中だけの大げさな表現とも思えませぬ。持統朝の吉野宮は吉野町の宮瀧遺跡と考えられ、その発掘調査成果によると、祈雨信の幽玄な雰囲気、信仰の源泉となったの峰を南正面に望むように建設されていたよう

です。そのため、度重なる吉野行幸には祭祀的な意味があったとも言われています。吉野の山と川が織りなすあの幽玄な雰囲気、信仰の源泉となったの峰を南正面に望むように建設されていたよう

吉野への天皇の行幸は、聖武天皇の代で一旦途絶えますが、898(昌泰二年)に、宇多上皇が吉野へ行幸した記録があります。さらに江戸時代には貞原益軒「天和廻り」や秋里籬島「大和名所図会」、本居宣長「菅笠日記」にも紹介され、現代では観光やハイキングに訪れる人が後を絶えませぬ。吉野は今も、多くの人にくり返し見られている魅力ある土地なのです。(県立万葉文化館研究員 吉原啓)

|| 原則、隔週掲載